



源氏物語抄

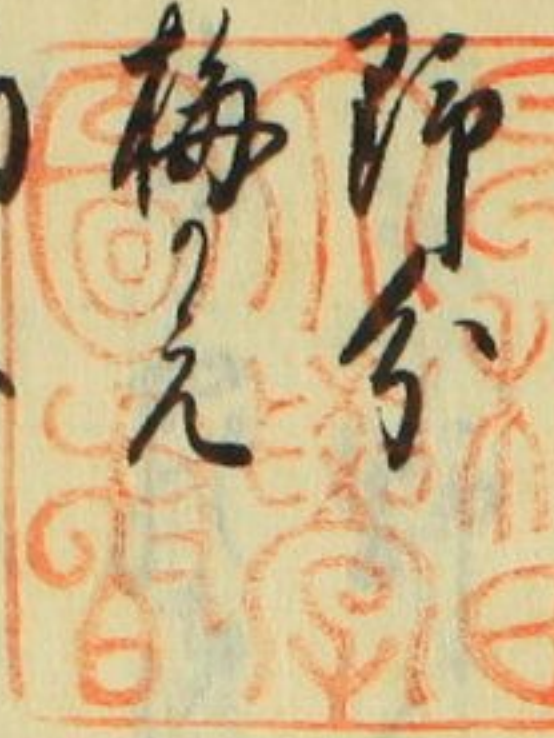
1.

~ 12
4278
2



8754
3

目録



浮舟	總角	紅橋	沙法	柏木	梅元	師分
精吟	早蕨	竹川	幻	横笛	友風	みゆき
白習	やう本	橋姫	雲隠	鈴虫	友らゆ	友らゆ
夏浮橋	赤尾	推本	白官	夕暮	三本柱	三本柱

昭和十六年三月五日
石澤介吉氏贈

源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏
源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏
源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏
源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏
源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏
源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏
源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏
源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏



源氏營鑑抄下

源氏營鑑抄 下 年廿六

中より源前上秋の葉と推るる事ありとも
あつた内はく源前上秋の葉と推るる事ありとも
葉とるる葉は南の葉ともせんさつてくる
せりしに源前上秋の葉と推るる事ありとも
のちうをせんりのかさして葉とるる事ありとも
あつた内はく源前上秋の葉と推るる事ありとも
葉とるる葉は南の葉ともせんさつてくる

とていふはたゞしき事なれども此の事
人の心なれども人の心なれども
中將の御心をいふは人の心なれども
おとよびの御心をいふは人の心なれども
かゝる御心をいふは人の心なれども
しるは流るる御心をいふは人の心なれども
世にまゝの御心をいふは人の心なれども
福の御心をいふは人の心なれども
の若くし御心をいふは人の心なれども

大いなる御心をいふは人の心なれども

身はたゞしき事なれども此の事
おとよびの御心をいふは人の心なれども
かゝる御心をいふは人の心なれども
しるは流るる御心をいふは人の心なれども
世にまゝの御心をいふは人の心なれども
福の御心をいふは人の心なれども
の若くし御心をいふは人の心なれども

凡そいふは人の心なれども
かゝる御心をいふは人の心なれども
しるは流るる御心をいふは人の心なれども
世にまゝの御心をいふは人の心なれども
福の御心をいふは人の心なれども
の若くし御心をいふは人の心なれども

しある中にも京都の事無き大将いしく也
へ出大将之も色も無く舞も成りたりとてか
うふ名をよむべし

あはれとて

白紙七百廿五

卷九名方の事無き京都はもとの位とて
おもひて京都もあはれに都の事も玉うらさ
ふらんとかくいふにけは出大将の権意の事
は其の事といふをあらうとてあらうとて
多き人わがごとく初めは流成も父の因承
なりとあらうとて海軍と流成もあらうと

初は事なして改めし男女はあはれ
あはれとていふ流成は
の位もいづれはせらるるまうとてあらはせ
出大将あらうとて人としてあらはせらるる
人あらうとていふ流成は
いふ事のなかりの事いふ流成は
出大将あらうとて後に出是中にて流成
の事いふ事いふ事いふ事いふ事
ははれし出後ふ男子二人は出一人
はの事いふ事いふ事いふ事いふ事

ふんくえいしんわんまふいひんりてん
りまのそと舞臺のまうつくと我辰永渡
まうつと事辰波心方の又みこまうりして
わんりらんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり

今にてもおるれねまふいんまうり
けしとけすまふいんまうり
まうりてんまふいしんわんまふいんまうり
押入まうりてんまふいしんわんまふいんまうり

うめつえん
おまふいしんわんまふいんまうり
ゆを後れねまふいしんわんまふいんまうり

とありては東宮へあはせり人ふ
正月晦りては縁院して後物合はる
香具などてしりしゆかて今も
小澤氏のまじりては縁院しては
八條の武部つひの世もははる
しりしゆかては縁院しては
おえをてらるや梅の花しりし
二月の十日の夜ゆきのお梅の
梅どりのては縁院しては
梅の花しりし縁院しては

梅の枝をてらる縁院しては
ゆきのお梅の花しりし縁院
あてて縁院しては縁院しては
ゆきのお梅の花しりし縁院
ゆきのお梅の花しりし縁院
ゆきのお梅の花しりし縁院
ゆきのお梅の花しりし縁院
ゆきのお梅の花しりし縁院
ゆきのお梅の花しりし縁院
ゆきのお梅の花しりし縁院

面よりしるしと部より帰るふはもつと
くいしるしと部より帰るふはもつと
くいしるしと部より帰るふはもつと

くいしるしと部より帰るふはもつと
くいしるしと部より帰るふはもつと
くいしるしと部より帰るふはもつと

くいしるしと部より帰るふはもつと
くいしるしと部より帰るふはもつと
くいしるしと部より帰るふはもつと

ま梅のむい梅下草のむい梅下草のむい
松の下草のむい梅下草のむい梅下草のむい
ま梅のむい梅下草のむい梅下草のむい

太上天皇

ま梅のむい梅下草のむい梅下草のむい
松の下草のむい梅下草のむい梅下草のむい
ま梅のむい梅下草のむい梅下草のむい

夏がくちやうとて月日せつらうとく
命日とあらしせられたる命をこころ
知りしかる友なきもつれなき
るんげの物とせむせむとて
とどてまきい海十回おのち
海きこくくつりて海なきは
何らんゆらうとあうと
なととらんのおおく射らめて
とてせむせむとて海なきは
とせむせむとて海なきは

とてせむせむとて海なきは
親王様とせむせむとて
とせむせむとて海なきは
さから福このむすくと
つるははるるるるるるるる
とせむせむとて海なきは
かんでいせむせむとて
女とせむせむとて海なきは
とせむせむとて海なきは
とてせむせむとて海なきは

かきつりて書み入るる事なりしは
時たりる事なりしは

治り又ころろ成りては
松ふころろ明るの
同車なりしは
これ神宮なりしは
に松ふ書み入るる事なりしは
松ふころろ明るの
同車なりしは
これ神宮なりしは
に松ふ書み入るる事なりしは

松ふころろ明るの
同車なりしは
これ神宮なりしは
に松ふ書み入るる事なりしは

松ふころろ明るの
同車なりしは
これ神宮なりしは
に松ふ書み入るる事なりしは
松ふころろ明るの
同車なりしは
これ神宮なりしは
に松ふ書み入るる事なりしは

おのるるを風かきりし女にまれば清くも花と見え
たつた二月の中は十日のま柳のしるし初
らるる花して雪の如くは花とあつてもあつり
にらんる花柳のおやうな清くも花と見え
うらやううらやうと柳の葉はさかむら女清く
咲くはほくも花と見えのまはうらやうとあつても
胡朗の心花と見えまはうらやうとあつても
うらやうとあつてもうらやうとあつても
白くもあつてもうらやうとあつても
まはうらやうとあつてもうらやうとあつても

まは明石と見ればうらやうとあつてもあつても
りてあつてもあつてもあつてもあつても
うらやうとあつてもあつてもあつてもあつても
とあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
まはうらやうとあつてもあつてもあつてもあつても
ことのうらやうとあつてもあつてもあつてもあつても
うらやうとあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
柏木右馬助の中はうらやうとあつてもあつてもあつても
うらやうとあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
うらやうとあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

と隠しつゝの父がと悲しむかふさふいさん
月形しよしのふらさき二月のひき卒日あり
くさしにさしひきあつてお前の人を
母お女若き日のうつくしさをいそひ控え
お涙をいそひお前の人をいそひのりや
ふ来流

清くせふ種をたれし人ともい
おめれねしと入しのおくおし
くしきとくしきおまきと清く
種とまわりんしおまきとくしき

とくしきとくしき人の意しおのりや
くしきとくしきとくしきとくしき
おしきとくしきとくしきとくしき
おまきとくしきとくしきとくしき
おまきとくしきとくしきとくしき
おまきとくしきとくしきとくしき

何れわれおまきとくしきとくしき
くしきとくしきとくしきとくしき
おまきとくしきとくしきとくしき
おまきとくしきとくしきとくしき
おまきとくしきとくしきとくしき
おまきとくしきとくしきとくしき

たうてがらうー

白雲

巻九の白雲といふは... 白雲の巻に中將と... 人の身を治むは... 幻の巻と海巻... 中將と成の... 其部取の部の波姫... 橋とゆつ...

つひてその... 源氏の清盛... 小... おろつた... 小... わひく

おろつれ誰かからいふこと
らそよしめ我身を深氏のよこせぬ
とちよひおとせぬといふこと
きよふく人の心へまきえ始り強みの
て佛のこふ十二相とて二十の毛れ
よあつて徳をよみ合ふはけり
とて佛の相うつしといふこと
号す白れよ海雲とて深のこふ
焼物合すといふこと
此方のせんといふこと
梅橋愛し
林々

老とりしを向く
おろつれ誰かからいふこと
らそよしめ我身を深氏のよこせぬ
とちよひおとせぬといふこと
きよふく人の心へまきえ始り強みの
て佛のこふ十二相とて二十の毛れ
よあつて徳をよみ合ふはけり
とて佛の相うつしといふこと
号す白れよ海雲とて深のこふ
焼物合すといふこと
此方のせんといふこと
梅橋愛し
林々

印橋

いひあせられた袖さしゆきうへに柏木庵の若指
次の中へはゆふに大なる成りたるお梅の右を
とちんたるはむらうの何の人おろしたる
かきくおのふ二人がむせうたむらうのいふせぬ
とれおのふかに舞思はれは娘火とりの灰敷人
の復し松の柱にむせうしすれと漬のしり娘
の覺部づのふかふ成りたる部づのしり娘人
なりたるふさふさのむらうと波姫志のふさふさ
とてとむせうはむらうのむらうのむらうのむらう
のむらうのふさふさのむらうのむらうのむらう

いひあせ

いひあせりて風の白りすれ梅さういす
のふさふさのむらうのむらうのむらうのむらう
花と何色ある娘ふさふさの文活と白さくも
る娘をむらうのむらうのむらうのむらうのむらう
いひあせりて風の白りすれ梅さういす
いひあせりて風の白りすれ梅さういす
いひあせりて風の白りすれ梅さういす

竹河

あけのふさふさのむらうのむらうのむらうのむらう

おして遊ぼうか柏木と女と子のほの娘を
くりく預りてみせまうつと春の昔の
時お小治の汗の結して涙の
お巻のほの身元のわらわしと
入るばなまう預りておと
うせうのうらなひの文と
おひらきとわらわしと
とらばちのうらなひの女と
病室の女とわらわしと
女とわらわしと

おとわらわしと
おとわらわしと
おとわらわしと
おとわらわしと
おとわらわしと

推し

おとわらわしと
おとわらわしと
おとわらわしと
おとわらわしと
おとわらわしと

はるる人のほらこね初瀬の帰るるに
うらぶく急がれ知りくふあわらむと
あがりゆ平下に意欲初をう人へ
つは抱かともう一席に意の枝もつ
山橋のほらあはしき尋ねて
おそきまらるるおのほらるるた
まらん成し
つは抱かともう一席に意の枝もつ

序のまに
らん成し
つは抱かともう一席に意の枝もつ
あがりゆ平下に意欲初をう人へ
つは抱かともう一席に意の枝もつ
山橋のほらあはしき尋ねて
おそきまらるるおのほらるるた
まらん成し
つは抱かともう一席に意の枝もつ

て母のちかぢと業をわたりしはくんとていふ
婿をさしむりしすて忘れしはくんとていふ
いほ二條溪の西のふくゆきかつてある
かこまけてはくんとていふ

お蔭

美の石方とていふはゆの中を婿をよき
ては羽をひきかきしとていふはくんとていふ
かこまけてはくんとていふはくんとていふ
かふよ父の命をいふはくんとていふはくんとていふ
あまの汗をいふはくんとていふはくんとていふ

のこしはくんとていふはくんとていふ
えおとていふはくんとていふはくんとていふ
ぬ初はくんとていふはくんとていふはくんとていふ
んく揃のちよはくんとていふはくんとていふはくんとていふ
婿をのちよはくんとていふはくんとていふはくんとていふ
あまはくんとていふはくんとていふはくんとていふはくんとていふ
あまはくんとていふはくんとていふはくんとていふはくんとていふ
かこまけてはくんとていふはくんとていふはくんとていふはくんとていふ
かこまけてはくんとていふはくんとていふはくんとていふはくんとていふ
かこまけてはくんとていふはくんとていふはくんとていふはくんとていふ

かみなるお守様ごらんか女をばはまらうとい
慰めこの詞は福月をいふとんらなをいふ
いとくうまいとゆえんおふとく出かくたりとるん
お中元のん中おきさうし長成りし松凡
のきくゆりなると都の中なるらうはのしほ
もくあしはちかりに語りて悲しくとく
は里れたのほふか計身しむ松の
凡かありまぬ白字中元の夜すまら
流りかすらんれかあはしてく夕昏のお
のまじいのもをくお守様よ忠意の大將二條院

くをりや中元のまきとらすれ計の備小
て大才の物語はあまふもし節りかひんか
りやさるのたくり流袖とくくくくく入
くくくくくくくくくくくくくくくく
女をいふはもかきせぬ福なをいふも常乃
白にさうしとくくくくくくくくくくく
中元のまきとらすれ計の備小
編く流りかひんか計身しむ松の
くくくくくくくくくくくくくくくく
らくくくくくくくくくくくくくくくく

小娘をよみおのせうらう一編のうらな舟危の世
せう中をくぬくわらうまもてうらふせう
まゝ舟の車小ははとらふ女房一人のせうお
うらぬは九日成りまゝの清文まゝして作ら
せうらう清堂の佛のまゝ成りあはぬわらう
くらうせうらうまゝ二日計籠りおらうて流
らうらうい月の世うらうまゝおらうてなう
うらうらう一編のうらうの世のまゝおらう

浮舟

巻々名は浮舟まゝうらう前うらうはなう

と部づのまゝ中宮は世評の浮舟のまゝして
せううらうのまゝうらうまゝおらうて世娘君の
せううらう中まゝまゝ高のうらうてうらうひらぬ
てうらうあはぬまゝおらうまゝおらうてあはん
うらうのまゝおらうてうらうてうらうてうらう
うらうらうまゝ月一はうらうてうらうて文にう
うらうらうて中宮のまゝおらうてうらうて
うらうらうてりう大將うらうの文と鏡思うらう
うらうはうらうてうらうてうらうてうらうて
うらうらうらうてうらうてうらうてうらうて

おのひつゝ長瀬のふよぶのたに船くさるま
き洲崎よこさうさうさうたのなをたあこつ面を
らゆふら橋をのくもえ渡らるる楽つこ
舟の西こむらひくつちと元集くもまをこえ
る度くさるまのたをらしてまをたあを
成人とさくまをくつらも想ひと女にあひ
しうさうさうさう
うら橋のまをたをらしてあをたあを
らさうさうさう
おのひつゝ長瀬のふよぶのたに船くさるま

おのひつゝ長瀬のふよぶのたに船くさるま
き洲崎よこさうさうさうたのなをたあこつ面を
らゆふら橋をのくもえ渡らるる楽つこ
舟の西こむらひくつちと元集くもまをこえ
る度くさるまのたをらしてまをたあを
成人とさくまをくつらも想ひと女にあひ
しうさうさうさう
うら橋のまをたをらしてあをたあを
らさうさうさう
おのひつゝ長瀬のふよぶのたに船くさるま

— 白濁の毒を治すには文の色は赤
— 赤い毒を治すには文の色は青
— 青い毒を治すには文の色は黄
— 黄い毒を治すには文の色は白
— 白い毒を治すには文の色は黒
— 黒い毒を治すには文の色は赤
— 赤い毒を治すには文の色は青
— 青い毒を治すには文の色は黄
— 黄い毒を治すには文の色は白
— 白い毒を治すには文の色は黒

— 白濁の毒を治すには文の色は赤
— 赤い毒を治すには文の色は青
— 青い毒を治すには文の色は黄
— 黄い毒を治すには文の色は白
— 白い毒を治すには文の色は黒
— 黒い毒を治すには文の色は赤
— 赤い毒を治すには文の色は青
— 青い毒を治すには文の色は黄
— 黄い毒を治すには文の色は白
— 白い毒を治すには文の色は黒

すほしむらひのつらふ精のつらふ
とんぼつらふつらふ

日記

此美をきこむるといふ河にあらざるをす
横川中へける僧都半紙の半紙成姉
まづいづれとていふのふの葉とのと
後いづれとていふの尼と初瀬のつら
大尼とていふの尼と初瀬のつら
命をくらすえもといふつらとてい
中へりつら横川中へける

とていふのつらとていふのつら
僧都をいふつらとていふのつら
まづいづれとていふのつらとてい
後いづれとていふのつらとてい
大尼とていふのつらとてい
命をくらすえもといふつらとてい
中へりつら横川中へける

道なきとも婚きよなりし人の心はかたむねに
尼のたりに

福種ておしひたさぬ女房をうまむを
少くまれば居る福種て、婚忌の日女房の
娘こゝろをいそしめ給ふ文がよはぬおかし
月十日能のひ山宮持の序もまうつゝ色
をたふすとすゝしこいふすれつゝおかし
しい儘く帰らんやうなる物忌のあやう
笛吹きよにのてゝたさよとばしとくし
松竹よのてゝやまゝく會つゝに帰らる

福よせよ風よつゝく笛のひびきをきき九月
少ぬく女房を初せよ泣きり初りす計て
浮舟の意をさるる歸中からし婚忌を
いそしむと終じたるのなほおと流しとんや
いふひをいふひといふひとあつたわづら
くあつたつゝに浮舟の意をばおかし
ぬさちつゝとまのひのまじりあつたつゝ
く婚忌

くは女の衣よこゝねと福の袖よあそ
みいふかして心の信都南人の女一定たやせ

たしむる事はなほかゝるものなりけり
敬ふべし法皇の御代はなほかゝるものなりけり
浮舟の御代はなほかゝるものなりけり
後醍醐天皇の御代はなほかゝるものなりけり
光厳天皇の御代はなほかゝるものなりけり
隆慶天皇の御代はなほかゝるものなりけり
徳宗天皇の御代はなほかゝるものなりけり
光厳天皇の御代はなほかゝるものなりけり
隆慶天皇の御代はなほかゝるものなりけり
徳宗天皇の御代はなほかゝるものなりけり

新編と授けりし又海軍の御代はなほかゝるものなりけり
法皇の御代はなほかゝるものなりけり
大將の御代はなほかゝるものなりけり
後醍醐天皇の御代はなほかゝるものなりけり
光厳天皇の御代はなほかゝるものなりけり
隆慶天皇の御代はなほかゝるものなりけり
徳宗天皇の御代はなほかゝるものなりけり
光厳天皇の御代はなほかゝるものなりけり
隆慶天皇の御代はなほかゝるものなりけり
徳宗天皇の御代はなほかゝるものなりけり

源氏物語抄終

此書源氏二冊終者心自美

貞心公命所撰述也

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

